



希望が丘

有り難い(ありがたい)

パナソニックの創業者である松下幸之助氏の言葉に

感謝の心が高まれば高まるほど それに正比例して幸福感が高まっていく

というものがあります。

私たちは、感謝の気持ちを表すときに「ありがとう(有り難う)」という言葉を使います。諸説ありますが、「有り難う」の本来の意味は、「命の大切さや貴重さに対して感動を表した言葉」であり、それがいつの間にか、感謝を表すときに用いられるようになったとされています。ですから、「有り難う」と感謝の気持ちを表すときに、実は同時に「これはめったにない貴重なことだ」という感動を、自分自身の心に与えていると考えられます。

「有り難い」の反対の言葉は、「当たり前」です。日常生活を送っていると、惰性に陥り、多くのものが「当たり前」になってしまいがちです。例えば、「毎朝目が覚めること」は当たり前だと思っているでしょうが、私ぐらいの年齢になると、「このまま寝て、明日の朝、目が覚めなかったらどうしよう。」とってしまうことがあります。若い皆さんには、全く分からない感覚だと思います。毎朝目が覚めることに対して、感動を覚える人もほとんどいないでしょう。

私たちは、すぐに様々なことを「当たり前」と勘違いしてしまいます。例えば、「電気を使って生活できること」や「お風呂に入れること」も、普段は「当たり前」だと思っていますが、停電や断水になったとき、あるいは災害などの非常時になって初めて、その「有り難さ」を感じるのです。

何でも「当たり前」としてしまうと、そこには感動も幸福も生まれません。逆に「有り難う」と数多く言えば言うほど、「当たり前」という感覚が正されると思います。そして、様々なことに感動を覚えるようになり、松下幸之助氏が言うように「幸福感が高まっていく」と思います。

感謝することに関しては、習慣による部分が多いと思います。ささいなことに対しても感謝の気持ちを持って「有り難う」と言える習慣を身に付けたいものです。

新型コロナウイルス感染症が流行してから、私たちの生活は大きく変わりました。それまで「当たり前」だと思っていたことが、実は「当たり前」ではないということ、できることが「有り難い」ことなのだというところをつくづく感じた場面も多かったと思います。できないことに対して不満を言うのではなく、安全を確保した上でどんなことならできるかを考え、前向きに生活していくことの大切さを学び、感謝の気持ちを持ったはずです。そして、そうできる人は「幸福感」を味わうことにつながったと思います。

大切なのは、少しずつコロナ前の生活に戻りつつある中で、様々な「有り難さ」を忘れないことです。先日の修学旅行の解団式でも話しましたが、多くの人に支えられて無事に修学旅行へ行って帰ることができたことに対する感謝の気持ちを忘れてはいけません。その気持ちを忘れなければ、これからの生活の中でも、様々なことに対して「有り難い」という感謝の気持ちを持つことができ、自分自身を幸福にすることができると思います。これは、1・2年生も同じです。小さなことにも感謝の気持ちを持つ習慣を身に付けていきましょう。

最後になりましたが、3年生の保護者の皆様には、今回の修学旅行について、様々な面でご理解、ご支援を頂戴しました。特に、初日の出発に関しては、皆様のご理解があったのと感謝いたしております。あらためて、お礼申し上げます。本当にありがとうございました。



(無料イラスト「イラストAC」より)